

公演日程

A program

第1568回 NHKホール
4/29 [土・祝] 開演 6:00pm
4/30 [日] 開演 3:00pm

The 1568th Subscription Concert
on 29th (Sat.) & 30th (Sun.) April
at 6:00 (Sat.) 3:00pm (Sun.) in the NHK Hall

指揮 スタニスラフ・スクロヴァチェフスキ
コンサートマスター 堀 正文

Stanislaw Skrowaczewski conductor
HORI, Masafumi concertmaster

シューベルト／交響曲 第7番 口短調 D.759「未完成」
(25')

Schubert (1797-1828)
Symphony No.7 b minor D.759 "Unfinished"

モーツァルト／交響曲 第39番 変ホ長調 K.543 (29')

Mozart (1756-1791)
Symphony No.39 E-flat major K.543

休憩

Intermission

モーツァルト／交響曲 第41番 八長調 K.551「ジュピター」
(29')

Mozart
Symphony No.41 C major K.551 "Jupiter"

B program

第1570回 サントリーホール
5/17 [水] 開演7:00pm
5/18 [木] 開演7:00pm

The 1570th Subscription Concert
on 17th (Wed.) & 18th (Thu.) May
at 7:00pm in the Suntory Hall

指揮 スタニスラフ・スクロヴァチェフスキ
ピアノ ジョン・キムラ・パーカー
コンサートマスター 堀 正文

Stanislaw Skrowaczewski conductor
Jon Kimura Parker violin
HORI, Masafumi concertmaster

プロコフィエフ／ピアノ協奏曲 第3番 八長調 作品26(27')

Prokofiev (1891-1953)
Piano Concerto No.3 C major op.26

休憩

Intermission

R. シュトラウス／交響詩「ツァラトゥストラはこう語った」
作品30 (33')

R. Strauss (1864-1948)
"Also sprach Zarathustra", Tondichtung frei
nach Friedrich Nietzsche op.30

C program

第1569回 NHKホール
5/12 [金] 開演7:00pm
5/13 [土] 開演3:00pm

The 1569th Subscription Concert
on 12th (Fri.) & 13th (Sat.) May
at 7:00pm (Fri.) 3:00 pm (Sat.) in the NHK Hall

指揮 スタニスラフ・スクロヴァチェフスキ
コンサートマスター 篠崎史紀

Stanislaw Skrowaczewski conductor
SHINOZAKI, Fuminori concertmaster

ブルックナー／交響曲 第8番 八短調
(ノヴァーク版／1890年) (70')

Bruckner (1824-1896)
Symphony No.8 c minor (Edition by Novak
1890)



指揮 conductor

スタニスラフ・スクロヴァチェフスキ

Stanislaw Skrowaczewski

1923年10月3日、ポーランドのルヴォフに生まれたスタニスラフ・スクロヴァチェフスキは、現役最年長指揮者の1人であろう。しかし、その活動はまったく衰えを知らない。首席客演指揮者をつとめるザールブリュッケン放送交響楽団とは、ブルックナーの交響曲全集の録音を完結させた後、現在はベートーヴェンの交響曲全集に取り組んでいる。2007年4月には読売日本交響楽団の常任指揮者に就任する予定。また、作曲家としても現役でもある。

幼い頃からピアノと作曲に取り組み、11歳のときにピアニストとしてデビュー。しかし、第2次世界大戦中の爆撃で手を負傷し、ピアニストとしてのキャリアを諦めた。46年に指揮者として正式にデビューし、クラクフ・フィルハーモニー管弦楽団、ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団などの指揮者を歴任。58年にアメリカ・デビューし、60年から79年までミネアポリス交響楽団（68年にミネソタ管弦楽団に改称）の音楽監督を務めた。84年から91年まではイギリスのハレ管弦楽団の首席指揮者。作曲家としては、2003年に世界初演された《交響曲》のほか、N響の定期公演でも取り上げた《管弦楽のための協奏曲》《ヴァイオリン協奏曲》《クラリネット協奏曲》などの作品を残している。

N響には96年に初登場し、以後、99年、2000年、2002年と共演を重ねている。得意のブルックナーの交響曲に関しては、N響とこれまでに《第4番》《第7番》《第9番》を演奏し、今回、遂に大作《第8番》に取り組む。プロコフィエフやR.シュトラウスの作品では作曲家としての視点が光るだろう。モーツァルトやシューベルトの名曲でどんなアプローチを披露するのかも、興味津々だ。

(山田治生)

ピアノ piano

ジョン・キムラ・パーカー

Jon Kimura Parker



ジョン・キムラ・パーカーとN響との初共演は1987年の九州公演、プログラムはチャイコフスキーの《ピアノ協奏曲第1番》だった。以降89年、92年、96年といずれも定期に登場、最近では2003年7月定期でマティアス・バーメルトとやはりチャイコフスキーの同曲で共演、類稀なる感興を紡いだ。

バンクーバーに生まれたパーカーは、母ケイコ・パーカーからピアノの手解きを受け、5歳にしてバンクーバー青年オーケストラと共演するという早熟ぶりを見せた。その後ジュリアード音楽院に進んでアデル・マーカスに薫陶を受け、1984年の第8回リーズ国際ピアノ・コンクールに優勝、一躍世界的な注目を浴びたのである。

それからというものヨーロッパ、アメリカ、アジアを問わずパーカーの世界的な活動が始まった。共演した指揮者はアンドレ・プレヴィン、レナード・スラット

キン、クリストフ・フォン・ドホナーニ、クラウス・テンシュテット、ギュンター・ヘルビヒ、ピンカス・ズーカーマン、ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ、クリストファー・ホグウッド、そしてロジャー・ノリントンなど錚々たる顔ぶれに加え、世界各地の音楽祭からの招聘を受け、リサイタルや室内楽アンサンブルに膨大な出演を果たしている。

さらにカナダのアウトリーチ集団「ピアノ・シックス」の創設メンバーとして、へき地へのツアーを積極的に行い、またテレビのクラシック番組に出演したり、ジャズ・ヴォーカリストと共演したりと広範囲で質の高い活動が続けている。

現在はヒューストンのライス大学シェバード音楽校で教鞭をとる他、オルカス・アイランド室内音楽祭の芸術アドバイザーも務める。カナダ勲章を授与された。

(真嶋雄大)

シューベルト Schubert

交響曲 第7番 口短調 D.759「未完成」

《未完成》交響曲という呼び方は、もちろん愛称だが、音楽の話題のなかで「未完成」と言えば、世界中どこでもたいていはシューベルト(1797-1828)の「口短調」交響曲を指す。それはもう作品固有の名称と言ってよいほどだ。この作品の完成度の高さは、作曲者の死後40年近くを経て初演されて以来、1世紀半にもわたって演奏しつづけられていることから明らかであるし、今日の聴衆のだれ1人としてこれを「未完成な」作品だとは感じていないだろう。だれもがブルックナーの《交響曲第9番》やマーラーの《交響曲第10番》をあえて未完成と呼ばないのと似ているかもしれない。

そもそも未完成というのは18世紀後半に成立した標準的な古典派交響曲が4楽章構成であったという前提で判断されている。たしかにこれらの作品も最初の計画段階では後続楽章があって、そのためのスケッチやフラグメントも実際に残されており、その意味では「未完の作品」ということもできよう。しかし、仕上げられた楽章の音楽的質の高さや芸術性、「完成度の高さ」は受容史が証明しているとおりであり、交響曲史上に残された傑作とってよいだろう。

ブルックナーやマーラーの場合、その死が作曲の継続を絶った結果として「未完」に終えているのだが、シューベルトの場合この作品は絶筆ではなく、何らかの理由によって、作曲を中断したのである。その理由の解明のため、初演以来多くの研究者がさまざまな説を発表してきたが、どれもいまひとつ説得力に欠ける。中断説、断念説、放棄説でもなく、忘却あるいは多忙、放置し忘れといったあたりが真相ではないかと筆者は思う。例えば、ピアノ・ソナタの場合、24曲に着手しているが、第1楽章と終楽章が同じ調で書かれた完成作品は半数ほどでしかなく、また、20曲ほどと取り組んだオペラ作品では完成作品は3分の1ほどでしかない。中には終幕の大団円近くまで書き上げながら完成されていないオペラさえある。こうしたシューベルトの創作姿勢から考えると、この「口短調」交響曲だけが、特別の未完成作品であったわけではないのである。

しかし、この作品には第3楽章のほぼ全体のスケッチがピアノ譜の形で残されており、その冒頭20小節はオーケストレーションが施されたフラグメントまで残されている。これはおそらくメヌエツ

ト楽章であり、アレグロ、ロ短調、3/4拍子による112小節の主部とト長調による16小節のトリオ部が作曲されている。メヌエット主部はピアノ・スコアの形で、トリオ部は単旋律の主題だけだが、反復記号も示されていて、楽章構成の骨組みはでき上がっていたのである。従って、これに基づき、第三者がオーケストレーションを試みた楽譜も数種類紹介され、演奏録音などもされたが、どれもさして評判にはならなかった。第1、2楽章の音楽内容と比較すると、ロ短調、ホ長調、ハ長調、ト長調といった頻繁な転調による響きの変化の面白さはあるものの、単純素朴(十分な推敲を重ねる前のラフなスケッチかもしれない)であり、先行の2つの楽章からすれば独創性に劣るのも確かである。

第1楽章：アレグロ・モデラート ロ短調 3/4拍子。チェロとバスによる印象的な単旋律の序奏主題8小節につづいてヴァイオリン群にさざ波のように揺れ動く2つ目の主題が現れ、第12小節からオーボエとクラリネットのユニゾンによる主要主題が歌われる。これらが第1主題部を形成している。ロ短調主和音(ロ・ニ・嬰へ)中からニ音だけがホルン

とファゴットによって引き伸ばされ、わずか2つの和音を経ることで(第41小節)ト長調に転調する瞬間の巧みさ、大胆さにこそシューベルトの真骨頂が窺える。シンコペティックな伴奏でチェロがオーストリア農民舞曲レントラーの姿をした第2主題を提示する。

第2楽章：アンダンテ・コン・モート ホ長調 3/8拍子。ホルンとファゴットのどかな響きの背景でコントラバスがピチカートで音階下降する序奏2小節が印象的。これに呼応して、チェロの対旋律を伴ってヴァイオリンが主題を提示する。音階進行と分散和音音形によるどかな進行に、やがてシンコペーション・リズムによる伴奏が現れ、緊張を孕んで音楽は大きく高揚してゆく。

作曲年代：1822年秋

初演：1865年12月17日、ウィーン

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、弦楽

(平野 昭)

モーツァルト Mozart

交響曲 第39番 変ホ長調 K.543

モーツァルト(1756-91)の最後の3つの交響曲、すなわち《第39番 変ホ長調》K.543、《第40番 ト短調》K.550、および《第41番 ハ長調「ジュピター」》K.551は、1788年の夏、短い間に続けて作曲されていった。それぞれ異なった性格をもつ3曲は、いずれ劣らぬ大傑作であるため、まとめて最後の「三大交響曲」と呼ぶことが多い。

「三大交響曲」の作曲は、モーツァルトの驚異的な創作力を示す例として、長いこと賛嘆の的となってきた。作曲の理由は不明だが、現在では、出版ないし演奏会といった具体的な目的がその背後にあったものと推測されている。もっとも、それらが実現した形跡はなく、どの曲も、出版は作曲者の没後のこととなった。初演がいつなのかも分からないが、これについては、モーツァルトの生前のことと考えるのが一般的となっている。

モーツァルトが「三大交響曲」を、いわばセットものとして計画的に構想したという見方も、今日では定着しつつある。実際、3曲は、《第39番》の冒頭楽章の壮麗な序奏が幕開けとなり、対照的な短調の《第40番》が続き、最後を《ジュピター》の圧倒的なフィナーレが締めく

くる、というように、全体としても統一のとれたまとまりをなしている。「三大交響曲」は、各曲が交響曲史の中に輝く名作であるのみならず、それぞれが互いに補完しあい、比類のない三部作をも形成しているのである。

その中であって、《第39番》が他の2曲よりやや軽く捉えられがちなのは、残念なことである。たしかに、《第40番》が古今の短調交響曲を代表する作品の1つであり、《ジュピター》がその呼び名にふさわしい堂々たる作品であるのと比べて、この曲は、当時の標準的な交響曲により近い作品であるかのような印象も、聴く人に与えるかもしれない。しかし、その実、《第39番》もやはり、きわめて革新的で個性的な交響曲なのである。

そのことは、なによりも楽器編成に明確に現れている。モーツァルトはこれまで、オーケストラの木管楽器として、交響曲に必ずオーボエを用いてきたが、この曲ではそれを外し、代わりに、この時代まだ珍しい楽器であったクラリネットを使用した。このような実験的ともいえる編成を、モーツァルトは約2年半前に、2曲のピアノ協奏曲、すなわち《第22番 変ホ長調》K.482(1785年)と《第23番 イ長調》K.488(1786年)で試し、

充分な成果を挙げていた。その延長上に、交響曲というジャンルに、それまでにない、ふくよかで新鮮な響きをもたらしたのが、この《第39番》なのである。

作品に盛りこまれた曲想もまた、その響きにふさわしいものばかりである。基調をなすのは幸福感に満ちた長調だが、ときに短調の陰が鋭い対比をなす。メロディの美しさもこの交響曲の特徴をなしており、複数の旋律線のからまり合うさまが、巧みな楽器法とあいまって、また絶妙である。陰影に富んだ和声法も印象深い。端正な外観と表情豊かな内容とのバランスが見事にとれた《交響曲第39番》には、モーツァルトの音楽の魅力が凝縮されているのである。

第1楽章：アダージョ 変ホ長調 2/2拍子—アレグロ 3/4拍子。

第2楽章：アンダンテ・コン・モート 変イ長調 2/4拍子。

第3楽章：メヌエット アレグレット 変ホ長調 3/4拍子。

第4楽章：フィナーレ アレグロ 変ホ長調 2/4拍子。

作曲年代：1788年6月26日、完成

初演：不明

楽器編成：フルート1、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽

(松田 聡)

モーツァルト Mozart

交響曲 第41番 ハ長調 K.551「ジュピター」

モーツァルトの最後の交響曲に付けられた「ジュピター」という呼び名は、作曲家自身に由来するものではない。この通称は、1820年前後にイギリスで定着したようであり、名付け親はヨハン・ペーター・ザロモン(1745-1815)という人物であると推定されている。

ザロモンはドイツに生まれ、イギリスでヴァイオリン奏者および興行師として活躍した音楽家だが、音楽史の上では、ハイドン(1732-1809)をロンドンに招き、最後の12曲の交響曲を産み出す機会を与えたことで知られている。それらの交響曲の通称「ザロモン・セット」に彼の功績は刻印されているが、モーツァルトの最後の交響曲には自らが呼び名を与え、この作品を有名曲たらしめるのにも大きな役割を演じた、という推定である。

もともと、《ジュピター》を作曲した32歳のモーツァルトにとっては、そのような通称付きで知られるようになるというのはむろんのこと、そもそも、これが生涯最後の交響曲になるとは、夢にも思わなかった事態であろう。ただしこの曲には、「三大交響曲」の締めくくりの楽曲としての性格がたしかに与えられている。楽器法や和声法に関して《第39

番》ほどのニュアンスの豊かさをもたない代わりに、力強さ、スケールの大きさ、平明な明るさが特徴をなしており、「三部作」に確固とした終結をもたらしているのである。この特徴こそが、ローマ神話の最高神を連想させたのであろうし、結果的に《ジュピター》を、まさに彼の最後の交響曲にふさわしい作品としているのである。

その点で特に注目されるのが、終楽章である。楽章の規模そのものが、当時の交響曲のフィナーレとしては破格であるが、内容的にも、対位法を駆使した、きわめて充実したものとなっている。圧巻が終結部分であり、楽章の5つの主要な旋律素材が順に登場しつつ結び付けられ、クライマックスへと登りつめていく。ちなみに、この楽章の終わりの音型は、《魔笛》(1791年)の2つの幕の締めくくりにも用いられている。モーツァルトが、《ジュピター》の終楽章をオペラに匹敵する大きく重いフィナーレとして構想したことを、なによりも雄弁に物語る事実といえよう。

もちろん、それに先行する3つの楽章も、そのようなフィナーレとバランスのとれた内容のものである。まさしく、モーツァルトの交響曲創作の到達点と呼ぶ

べき《ジュピター》は、また同時に、その後のこのジャンルの発展に対して、1つの原点というべき存在ともなった。とりわけ、ハ長調で締めくくられるドイツの交響曲、例えばベートーヴェンの《第5番》、シューベルトの《第8(9)番》、シューマンの《第2番》、ブラームスの《第1番》、ブルックナーの《第8番》などの諸傑作に、《ジュピター》からの影響を直接、間接に聴き取るのは難しくない。

第1楽章：アレグロ・ヴィヴァーチェ ハ長調 4/4拍子。

第2楽章：アンダンテ・カンタービレ ヘ長調 3/4拍子。

第3楽章：メヌエット。アレグレット ハ長調 3/4拍子。

第4楽章：モルト・アレグロ ハ長調 2/2拍子。

作曲年代：1788年8月10日、完成

初演：不明

楽器編成：フルート1、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽

(松田 聡)

プロコフィエフ Prokofiev ピアノ協奏曲 第3番 ハ長調 作品26

1908年12月、17歳のプロコフィエフ(1891-1953)は自作のピアノ小品(作品4)でデビューし、みごとな演奏と大胆な作風が衝撃を与えた。そして交響作品ほかを試み創作に習熟していく日々、挑戦した大作の1つがこの協奏曲である。彼は多くの主題を16年に決め、翌17年にスケッチ。18年春にはこのスケッチがメディアに注目されていた。だが18年5月7日彼は保養を口実に旅立つ(18年6月1日から2か月の滞日中、東京ほかで演奏した)。以後、欧米各地で演奏のかたわらオペラなどと共に創作を続け、21年フランスのブルターニュ地方で協奏曲を完成。ロシア象徴派の詩人バリモントに捧げた。初演は21年12月16日、シカゴ。翌22年ニューヨーク、ロンドン、パリなどで作曲者による演奏が続いた。欧米各地の聴衆は彼の自信作に概して懐疑的だったから、23年10月のモスクワ初演大成功に、作曲者は大喜び(同胞たちは一部の旋律に、ロシア歌謡のイントネーションを聴きとったのだ)。作曲者は27年2月に革命後の祖国を初めて訪れ、36年5月正式に帰国。48年スターリン政府の作曲家批判にあうことになる——後に名誉回復をはたすが。

全体は均整のとれた3つの楽章からなり、大胆な調性展開と全音階がめだつ。また高貴な叙情性、グロテスクな風刺、

荒々しく野蛮なまでの動力性ほか、さまざまな音楽要素の鮮明な対比は、若きプロコフィエフらしい。そして憂いからはじける喜びまで感情の広いゆらぎが、高度の技巧で表現される。この曲は革命と新政府樹立、騒乱の祖国脱出など、歴史と人生の一大転換期に生まれたが、大胆な実験から成熟へと彼の成長を示し、第1次ロシア時代の総決算といえるだろう。現在では彼の代表作、20世紀の優れたピアノ協奏曲の1つとして、高く評価されている。

第1楽章 アンダンテーアレグロ ハ長調 4/4拍子 自由ソナタ形式。

第2楽章 アンダンティーノ ホ短調 4/4拍子。彼のもっとも美しい旋律の1つといわれる主題(13年作)と、5つの変奏曲、コーダ。

第3楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo ハ長調 3/4拍子 ロンド。ABA'CA”。

作品成立：1916～21年(一部は11年、13年の作)。

初演：1921年12月16日。シカゴ。作曲者のピアノによる

楽器編成：フルート2(ピッコロ1)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、大太鼓、カ斯塔ネット、タンブリン、シンバル、弦楽

(伊藤恵子)

リヒャルト・シュトラウス R. Strauss

交響詩《ツァラトゥストラはこう語った》作品30

リヒャルト・シュトラウス(1864-1949)の作品の中でも、クラシック・ファン以外の多くの人に知られているのが、この《ツァラトゥストラはこう語った》の冒頭部分であろう。スタンリー・キューブリック監督「2001年宇宙の旅」で使われた冒頭のファンファーレの音楽は、その無限の広がりを持つ宇宙の様子をあまりにうまく活写していたためか、この部分だけが突出して有名になってしまった。

この本の著者であるフリードリヒ・ニーチェは、西洋哲学のすべては人間の意識の中にしか存在しない「形而上学的なもの」を扱ったものであり、生きることの意味を失わせるような「ニヒリズム」に支配されているものとする。このニヒリズムに対抗する思想をニーチェは終生探し続け、ついに「永遠回帰」と呼ばれる考え方にたどり着く。人生の目的や究極の価値ではなく、世界はただ同じことを繰り返していただくだけである。しかし、だからこそ自分がかかわっている現在を大切に、力強く生き続けることこそが重要なのである。主人公ツァラトゥストラは、この生き続けることを「力への意思」と名づけ、この意思を体現した新しい人間を「超人」と呼ぶ。ニーチェは、人間の意志とは無関係に

移り行く自然の中で、人間がいかにこの自然の中で主体的にかかわっていくことができるかを説いている。

かつてミュンヘン大学で哲学の授業に出席していたR.シュトラウスは、ワーグナーにも多大な影響を与えたショペンハウアーやニーチェに深く傾倒し、その著作も多く読み込んでいた。自身はこの作品について、ベルリンでの初演を担当した指揮者ニキシュへの手紙にこう綴っている。「この作品では哲学的な音楽を書こうとしたわけではなく、ニーチェの偉大な著作をそのまま音楽で描こうとしたわけでもありません。人類の発生からその発展にいたるさまざまな段階を経ながら、ニーチェの『超人』の概念を宗教的、科学的に描こうとしたものです。この交響詩全体は、ニーチェという天才にささげられた私のオマージュなのです」

曲の各所に与えられた表題は次のとおりである。序奏→後の世の人々について→大いなる憧れについて→歓喜と情熱について→埋葬の歌→学問について→病より癒えゆく者→舞踏の歌→夜のさすらい人の歌。原作は全4部に分かれているが、これらの表題はその中の章から、作曲家が任意に抜き出した

ものである。シュトラウスは自然と人間の対立というテーマを、音としては隣り合いながらも調性的にもっともかけ離れているハ調とロ調に託し、人類の発展の「さまざまな段階」をあらわす音楽の中で、この2つの調を鋭く対立させる。例えば「学問について」では、自然のなかでの人間の営為がワーグナーで描かれ、この2つの調がお互いにお互いにぶつかり合う。終結部では自然の力の前に屈した人間が哀れみを請うが、自然はこれを峻拒する。ロ長調の和音とハ音が交互に現れるこの箇所は当時からセンセーショナルなものとして議論を呼んだ。アルプスの麓の町ガルミッシュで後半生を送ったシュトラウスの自然への憧憬の念は、後に《アルプス交響曲》などでも示されることになるが、この曲では両者はより厳しく、和解の余地のない形で向き合っている。

作曲年代：「1896年2月4日着手、同年8月24日ミュンヘンにて完成」(総譜のあとがきより)

初演：1896年11月27日(指揮：R.シュトラウス)、フランクフルト・アム・マイン

楽器編成：フルート3(ピッコロ1)、ピッコロ1、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、Esクラリ

ネット1、バス・クラリネット1、ファゴット3、コントラファゴット1、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、テューバ2、ティンパニ1、大太鼓、シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、鐘、ハープ2、オルガン、弦楽

(広瀬大介)

ブルックナー Bruckner 交響曲 第8番 ハ短調

ブルックナー(1824-96)のこの曲には2つのヴァージョンがあるが、通常演奏されるのはもっぱら第2稿のほうである。第1稿は、《交響曲第7番》が完成してから1年近くを経た1884年の夏に書き始められ、1887年8月10日に完成した。ブルックナーは、9月19日、スコアをミュンヘンの指揮者ヘルマン・レーヴィに送った。レーヴィは1885年3月に《交響曲第7番》のミュンヘン初演を成功させており、以来ブルックナーは彼に絶大な信頼を置いていたのであるが、レーヴィはこの新作を理解することができず、演奏を拒んだため、ブルックナーは書き直しを始めることになった。新稿は1890年3月10日に完成した。

レーヴィは新稿を受け入れたが、すでに病気のためにアカデミー・コンサートの指揮を退いており、代わりにマンハイムの首席楽長であるフェリクス・ワインガルトナーにあたってみることを勧めた。1890年10月2日、ブルックナーは、当時まだ27歳であった彼に「最初の演奏の成功に子どもの将来がかかっています」と期待を寄せ、両者の間にしばらくの間、手紙が交わされたが、この計画はいよいよ演奏という時点になってワインガルトナーが急遽ベルリンに移ることになったため、頓挫してしまった。

しかし1892年に入ってから、皇帝より補助金が出賜され、この作品の出版が行われることになった。そして12月18日、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏会において、この日唯一の曲目として初演されたのである。指揮をしたのは、すでに《交響曲第4番》の初演や、《テ・デウム》の初演、そして《交響曲第7番》のウィーン初演を担当したことのあるハンス・リヒターであった。楽友協会大ホールは満員となり、楽章が終わるたびに盛んな拍手が贈られ、演奏終了後には、ブルックナーに対して月桂冠が3つ —のうち1つは皇帝から — 贈られたのである。

第1楽章：アレグロ・モデラート ハ短調 2/2拍子。ブルックナーの通例として、弦の最弱音のトレモロとともに開始される。第1主題は、ハ短調の曲であるのにヴァイオリンとホルンがヘ音を持続し、中低弦によって示される主題旋律は調的にきわめて不安定である。やがて強音で主題が再提示されるが、三重および二重の付点を伴ったそのリズムは、ベートーヴェンの《第9》の第1楽章の主題と同じである。ブルックナーは1860年代の後半に《第9》をウィーンで聴いて以来、数多くの交響曲においてこの曲からの影響と思われる

さまざまな事例を示してきている。第2主題は歌謡的な楽句で、彼の好みのパターンである2+3のリズムによってト長調で始まるが、ただちに転調のプロセスに移ってゆく。第3主題は行進曲のようなスタイルで、変ホ短調で開始される。

第2楽章：スケルツォ。アレグロ・モデラート ハ短調 3/4拍子。ブルックナーが第2楽章にスケルツォを置いたのは、《交響曲第2番》の第1稿以来のことであるが、ここにもベートーヴェンの《第9》からの影響をみることができのかもしれない。トリオ(ゆっくりと、変イ長調、2/4拍子)は第1稿とはまったく異なって新しく書かれており、前半後半のそれぞれ終わりには、第1稿のこの個所には無かったハーブの響きが添えられ、これによって次のアダージョの気分が準備されるといえよう。

第3楽章：アダージョ 厳かにゆっくりと、しかし引きずらないように 変ニ長調 4/4拍子。シューベルトの《幻想曲 ハ長調「さすらいの人」》の嬰ハ短調部分を想起させる主題旋律が、3+2の基本単位にシンコペーションをからませた弦の伴奏にのって登場し、深々とした気分を湛えた音楽が展開される。

第4楽章：フィナーレ。厳かに、速くなく

ハ短調 2/2拍子。第1主題は勇壮な性格を示す音楽で、ブルックナーは1891年1月27日、ワインガルトナーに宛てた手紙において、「私たちの皇帝は、当時オルミュッツでツァール[ロシアの皇帝]の訪問を受けました。それゆえ弦はコサック兵の騎行を、金管は軍楽を、トランペットは皇帝とツァールが会見するときのファンファーレを(描いています)」と標題的に説明している。第2主題はいくつかの声部が対位的に柔らかに組み合わせられた楽句。第3主題は第1楽章に対応するかのように、変ホ短調で、行進曲のように進んでゆく。楽章の最後には、全4楽章の各主要主題が、ハ長調に変化した形で一堂に会し、長大な劇進行の結びとなる。

作曲(改訂)年代：1887年中頃～90年3月10日

初演：1892年12月18日、ハンス・リヒターの指揮するウィーン・フィルによる

楽器編成：フルート3、オーボエ3、クラリネット3、ファゴット3(コントラファゴット1)、ホルン8(ワグナー・チューバ4)、トランペット3、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、トライアングル、シンバル、ハーブ3、弦楽

(根岸一美)